



古川博士の 気象コラム

古川武彦…理学博士。元気象庁予報課長、札幌管区気象台長。退官後に「気象コンパス」を立ち上げ、気象の啓発活動などを行う。

「夕焼け 小焼けで 日が暮れて…」。西の空が夕焼けに染まると、今日も一日無事に終わったとホットするとともに、ふるさとを懐かしく思い出す方もおられるかと思います。米原市の琵琶湖畔で育った私は、子供の頃、湖面に映える夕日を毎日のように眺め、水遊びに興じていました。

ところで、「空は青いのに、どうして夕焼けは赤いの？」と疑問を抱かれる方もあるかと思います。太陽光線は無色透明ですが、紫外・可視・赤外線と幅広い波長の電磁波で構成されており、目に見える可視光線は短い波長から紫、青、…、赤と7色に分かれています。

太陽光が上空から大気に侵入する際、窒素や酸素などの空気分子によって、青い光線が一番強く四方八方



▲夕方の「一の鳥居」、上の写真のような赤く染まった空を撮影してはいかがでしょうか？

に「散乱」されるため青く見えます。秋は特に空気が澄んでいるため、透き通るような紺碧の空となります。

一方、夕方のように太陽が斜めから差す場合は、光線の経路が長くなるため、まず青は前方で散乱されてしまい、残りの長い波長の黄や赤の光がやってくるため、赤っぽくなります。雲があれば、空は「夕焼け雲」のオンパレードとなります。

夕焼けの仕組みは、北浦などでも観察できます。沖合から打ち寄せる波長の短い「さざ波」は、葦や水草で反射・吸収されてしまい、残りの長い波が岸辺に到達するのと同じです。